

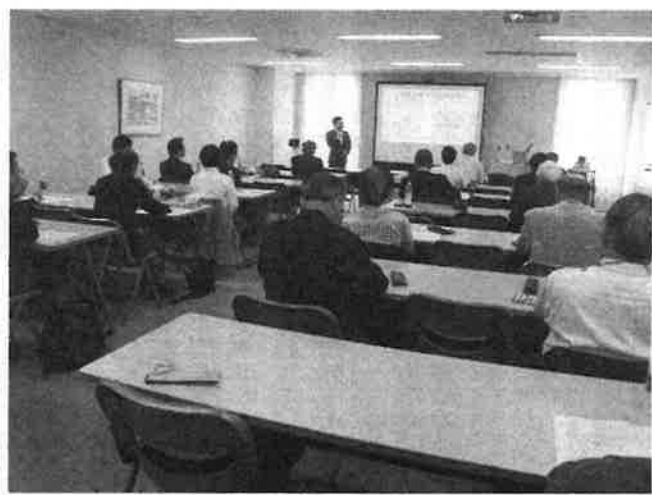
SRM学会 19年度関東部会開催

4氏が多彩なテーマで研究報告

ソーシャル・リスクマネジメント学会(戸出正夫理事長)は5月18日、タワール船堀(東京都江戸川区)で2019年度関東部会を開催した。中居芳紀関東部会担当常務理事の総合司会の下、「ニッチ戦略とエンゲージメントが織り成す『オンリーワン成功事例』の考察」「グローバルリスクとローカルリスク」「近時の賠償責任保険―開発の軌跡とその実績」「介護人材の定着リスクに係るハラスメントの実態」の四つのテーマで研究報告が行われた。

淺津光孝氏(淺津中小企業診断士・社労士事務所)は「ニッチ戦略とエンゲージメントが織り成す『オンリーワン成功事例』の考察」と題し、中小企業の最善の勝ちパターンの一つである「オンリーワン」の地位を築き上げることに、事例を通じてその成功要因を検証し、新しい中小企業経営のあり方を論じた。事例としてA社が「レトロ印刷」でオンリーワンの地位を築くまで

の経緯を詳しく紹介。A社事例の成功の要因を分析し、競争優位の戦略の側面と人的資源の側面からの検証を行った。そして、労働生産性が上がらない要因を分析し、経営者の「組織の戦略」と働く者の「個人の価値観」のミスマッチン達成に向けて爆発的な心理的エネルギーが発生すると論じた。森田欣二郎氏(森田環境・情報コンサルタント)は「グローバルリスクとローカルリスク」と題し、各産業界では名だたる企業の不祥事、一般社会・家庭では子どもの虐待問題などが生じており、社会に対する信用失墜と国威の威信に関わる喫緊の課題があると指摘し、いま起きていることをグローバルの視点とローカルの視点から探り、改善すべき課題を提示した。そして、現代はダイバーシティ(多様性)を許容する社会へシフトする過渡期であり、これまでの価値観とこれからの価値観に相違が生じていることが問題だと論じた。昭和は破壊から成長の時代、平成は停滞、是正、成熟の時代であったが、令和は新たな創造・革新の時代であるよう期待され、世界各国が認める日本独自のオリジナルティの行動を提唱すべきだと主張した。亀井弘明氏(日新火災)は「近時の賠償責任保険―開発の軌跡とその実績」と題して論じた。まず、新種保険のマーケット状況を詳細に紹介して新種保険の明い将来を描き、自動車保険の転化による自動車保険の縮小に代わる新種保険種目として賠償責任保険を挙げた。新しい賠償責任保険は複数の商品を一本化することで代理店の扱いやすさを追求し、基本特約と任意特約の組み合わせにより顧客への最適な補償の提案を可能にしている。そして主な特色として管理財物の損壊、事故発生時の初期対応費用、サイバーリスクなどの自動補償等を挙げた。これらにより中小企業にとってもなじみ深い賠償責任保険となり、介護サービス業向けの例を紹介しつつ、業種別の分かりやすいプランづくり、マーケットの開発に期待すると結んだ。



四つのテーマで研究報告が行われた

渡邊啓子氏(元大阪産業大学)は「介護人材の定着リスクに係るハラスメントの実態」と題し、介護労働の人材確保を難しくしている要因を分析し、賃金、社会的評価、風評、労働環境等について現状を整理した上で、介護労働や労働環境に対する誤解があると主張。ハラスメントに関しては、利用者や家族の権利意識の強まりによる暴言・暴力、介護労働者に対する性的嫌がらせ、介護保険法上の介護サービスに対する無理解、介護労働者の社会貢献心理に対する過剰な依存、介護事業者等のハラスメントに対する固定観念などに分類し、それぞれ具体例を挙げて論述した。そして、介護労働者を守るための対策として、不足する介護人材の確保と介護労働者の人権の尊重が急務であり、少子高齢化の現在において介護分野の人材の確保を考える際に、労働者の人権を守ることを基本に考えなければならぬと結んだ。

4氏の研究報告は報告時間が限られていたにもかかわらず、いずれも充実した報告だったと好評だった。